

今年の六月、母が病気になった。

病気とは縁がなく、元気な母から病名を告げられたときには驚いた。誰もが耳にしたことのあるその病名は、僕を一瞬にして凍らせた。母は詳しい検査のため、鹿児島市内の病院へ行くことが増えた。病院から帰ってきた母には、長時間の検査の疲労に加え、悩んでいるような様子が見られた。僕が、

「お母さん、大丈夫。」

と声をかけると、

「これからまだたくさんの検査をしないとイケないし、治療費がかかるから心配だな。」という返事だった。ただでさえ、病気にかかっている人は、不安な毎日を過ごしているのに、安心して治療に専念できるような保障はないのだろうかと思った。しばらくして、母の表情が明るくなっていた。理由を聞くと、「限度額適応認定証」という医療保障を取得できたそうだ。「限度額適応認定証」とは、医療機関の窓口で保険証と一緒に提示することにより、医療機関ごとの窓口で支払うひと月の金額を、自己負担上限額までに軽減できる認定証だそうだ。

「限度額適応認定証」を取得した母は、治療に前向きになっており、

「払うときは大変な税金だけれど、こうして生活を保障してもらえるのはありがたいな。これからもしっかりと税金を納めていこう。」

と笑顔で言っていた。父母や大人が納めている税金が、多くの人を助け、その中の一人である母も助けられていることを実感した。

しかし、数日後、一つの疑問が湧いた。母は、治療によって脱毛が始まっており、前準備としてウィッグを購入していた。ウィッグは、長さや毛の質、髪型など様々であり、金額も低額なものから高額なものがあるようで母は悩んだ末、今までと違和感を無くするためある程度の金額を選んだそうだ。そして、購入する際、ウィッグへの助成金があるか調べたそうだ。すると、鹿児島県では、三十五の市町村では実施されていたが、私たちの住んでいる指宿市では実施されていなかったそうだ。母は、

「病気にならないと気付かなかった。いろいろなところで困っている人がいる。税金を納めているのは、どこの市町村も同じなのに、助成金に違いがあるのは残念。」

と肩を下ろして言った。病と闘っている母の言葉は、とても重いと感じた。義務である税金納入。しかし、何のための、誰のための納入であるだろうか。助けられている人、助けられていない人、偏りがあるといけないと思う。病と闘っている母は強い。苦しそうな様子も見られるが、今までと変わらず笑顔でいることが多い。母のように病を抱えている人が、懸命に病と闘い、乗り越えられる世の中であってほしい。そのため、希望、助けとなる助成金はとても大切である。全ての人希望を持ち、生き生きと生きられる社会になってほしいと願う。